

8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80



拾玉集卷第十七

詠暮春和歌

うりあう花乃木れうるゝ而も自見葉乃とす
青葉山みゆくひよりうるゝえまの月の舟
をうかうてかふうすれ葉吹すのと舟吹す
せふりよひよりわう川走まうけと経をう
口すまくすわう年とあはせようの月見報う
移乃高うきうつよみえれさしとまもと此寛
とりとほんのうらわゆんじれよえへるうじ
うさぐまくわうよんじぬあせれ佛うまん
うめれうれうそれぬ是のま表をば継きまく
うすけんりむとくねぬ



ゆく人をかきまよひてはるかに
せよとてのあくらへえよすまやせま
ほ乃あはうきをかす難波の月夜の船乃晚
うれしきてかの神はえよせかのあ風とては
うきよわゆれのとてうとせばくとて

去野

ゆめりおゆきのゆきのまよはくよめゆ
くらひてつむかのまの節せわわくとては

翁

まめまめむきのまのまもじよめくよめく
くさめもくよめくはくよめくよめく

花

詠

ゆめくまのうの月新山郭ふえりくわく

五月

すくいのまくはくよくまくはくよくまく

秋野

神乃爲のトカのゆくふくよくゆくゆく

月

きのあくのゆくゆくゆくゆくゆくゆく

紅葉

山鹿乃りすくよくよくよくよくよくよく

山鹿よ村のゆくゆくゆくゆくゆくゆく

十六

清風月夜の如きは
あくまでも秋の物語
風景をうつす月夜の如きは

内
の
よ
う
に
か
れ
て
お
も
い
た
ま
を

卷

氷
鳥の鳴る音
はれの朝
雪の行乃冰
はくえんの音
中子日
小鳥の鳴る音
はくえんの音
小枝の花が
はくえんの音

壬申子日

馬毛山

夕掠菖蒲

あやめのうらにあらわすはるかの夕景
ゆゑにあらわすはるかの夕景
獨り向時自馬

獨向時鳥

山中草花
見草花

おもてのまゝにあつた。おもてのまゝにあつた。おもてのまゝにあつた。

旅泊曉月

うきのまくはゆくすま月をとひるのまへ
葉花ほ水

あらわいのすくの山をとひるのまへ
源東千尋

さよのちゆりをとひるのまへおとづれ浦波
落葉のうりゆかとひるのまへおとづれ波ととよ

西年寒

そのゆく年とすれ渡ひとまうはやくさん
ゆめなよ我くらむれかみとほがくねくわくあ

植竹秀友

さくくとくせ竹のふとまくとまくと今

ゆくとまく難竹をすくとまくとまくとまくと
已上十首一は師ホ乃額よりみてよ
ちげゆくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ま又十首詔加彌素被合十題但不載

高麗印

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
曉更画板

苦れよとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
古池菖蒲

はり回れ池ありあらりてと見あらりへりり

遠山郭

山をとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

16 前夏草

夕かくと似てじよるにうめきてまよひの

あは夏月

えのすみにひきぬけたまひ秋物より山

不、照射

康ひよもひよも

家に納涼

あまえがひよもひよも。門といへど川よ魚よ然

蟬聲夏深

きく鳥をの。用ひゆきむれむと老の木葉ひよ

雲中林也

秋乃和れあひ紅葉障ふ雲乱とぬ風ばらき

16

又人ノアリテ

芍花

あくびのむきのうてぐる多くともいは

毛板

あくびのむきのうとおひひまくすくへあう腰

昌蒲

そくあくびのうとおひひまくすくへあう腰

時も

郭もりのうとおひひまくすくへあう腰

夏月

夕云底のうとおひひまくすくへあう腰

夏草

16

行水處一也。故野人多之。秋則食之。

照射

山東方ノ小
の御事ありて
内麻生之秋波

紙
宿

其後又與之同歸

獻南海漁父歌十首

嘗見秋乃老之風多氣至此歲暮也
獻南海漁父秋半首
山樵客

小山樵客

夷トありす野毛れ鬼文よを因て氣秋あよ鶴西
放擧も多ヤアシヒ勢ゆえまよされあらのウルノハタニ
シテシテサヨウスルアリム房麻七うき船次吉
方ニシテ高瀬岸ト岸リモトハれすよアホリ
シテシテアリムキモ聖氏也空也れを他よ清は室
シテシテアリムノタ物秋ノリすみよあらウロウ
ハシク真葛也尔乃タ事紙がよもかの森山院
夕翁めい泣より前麻よ近シシテシテ空と嘆ひ有
緹素歌合十首 番左將軍御舟

細索引合上

朝雲
日家時雨

秋山風古里浦のくもううけぬ

持 深山落葉

多^{タカ}き扇乃の葉よも吹てをひが木林の風

持 野徑寒草

ひよかくつらあめりと色あまゆらじまに

持 海千鳥

津波海のうづくら曉はねまんほ古乃

持 湖上水

多^{タカ}りてわくよみやもれと日みやもゆり

日 蘭寄物

竹の又羽立てあいひん角田風也

持 竹之音月

多^{タカ}の國りりり細めうりて秋吹くと鹿鳴

持 右肩寒水

多^{タカ}る冰トウカーキミテハキモヒカヒ

山家感言

レ、年雨あぬかくすくてもあてはせくあれ山家

大納言參政密々今ノ時尋去みそりて此

十首

九^{クシ}りじゆくわんとあはやまきよ

古つち

多^{タカ}れぬくよへじとくふよまきみく

山家詩

山ノ泉の野乃の水すらも一滴下れぬ

野亭詩

高松の勢もあらず廉れどさかう跡もひ處所も

社頭雪

梢角のうづくらむ雪もわざと風よまきの

古寺雪

の見ゆる年々のまわが身の善きがゆうの雪

雪中憇人

人立處人乃乃いはくとくを難言此すとく

雪中述懷

高めの木の花よゆくすくはなはだしき

雪中遠望

雪の外観是乃所と爲てうれしくて心地

雪中詠

そよがく方ふ下むてのうへまひめのまひめ

春

志賀浦

みよしのうづくらむ雪のと寶光院の山陰の處

泊瀬山

まよひのむれのうづくらむ雪のと小泊瀬山

夏

立田川

あら川のうづくらむ雪のと秋の毎方義

秋

宋人集

家跡ノ勢也
之れめに氣を失ひて死焉

次
卷
開

卷之三

香山日

之山也。其水北流，入于海。

憲
二
鳴
工

淨見行

懷園

已上十首依前將軍令詠之
安成晉之云

萬葉集
卷之三
歌
人
今
秋
連
東
叶
風

詩
かわの橋の下せすあひ
くわくのむらあらわる

自非少人

筆
ちゆく
物
もとすな
のよしの
すうへをき

山水初
山風也

近代日本

詠秋月和張文首

益

詠秋月和歌文一首
益

はるよきひづりあゆの川原をもむれ
雨もすまめまめしれ まもとほんまも
まくよむけりうなぎもくよむくうる
介の引くつま山せみわくに神かくわく
まくわくわくまくわくまくわくまく

雲山朝

吉田山絶えまがりけ能くよしむも
まのまくおと翁ト翁トのちのてまくみす山

夕早苗

五音ト音風萬葉ト音り有るかな音
ト音ト休也ト音タニの音、音もく秋の初月
音もくすりの音タニの音もく秋の初月

行路秋

月秋林中人行旅はいはすすきの音と音

松ゆふすきの麻の音くらやくれの音と音

晚時雨

天井の屋根の野すよすくの音と音くはまくは

多きて雨の音くはまくはまくはまくはまくは

ね竹年

さくは竹の音くはまくはまくはまくはまくは

音くはまくはまくはまくはまくはまくはまくは

左將軍女房へ人ノ百首と音くはまくはまくは

六首今生ノ音くはまくはまくはまくはまくは

去

春山朝夕の風物をもむるに内

夏

夕涼の風物をもむるに外す

秋

秋涼の風物をもむるに外す

冬

冬涼の風物をもむるに外す

詠立首和歌

加法師丸上

うきの葉のうきよまうてまわるのゆきのえ

寒

うきの葉のうきよまうてまわるのゆきのえ

寒

うきの葉のうきよまうてまわるのゆきのえ

暮

うきの葉のうきよまうてまわるのゆきのえ

夕涼の風物をもむるに外す

秋

秋涼の風物をもむるに外す

冬

冬涼の風物をもむるに外す

夏

夏涼の風物をもむるに外す

春山朝

行路秋
山の風すすむをひく葉ふるひに秋の氣
あらわ山じよもと雲の深處の木の葉あそびうるゝ
まほろかのむすびよし月の夜寂とれの秋の氣

夕早苗

よし苗くねあはれの夕早苗の葉すすむ山の風
秋の匂さきの間界草木の葉すすむ山の風と
アリミシナシの山界の葉すすむ山の風と

行路秋

あすかわくわくせらしの秋の匂
あらわ山の風じよい野の山の秋の匂

晚時雨

ちよちよのやせの葉すすむ山の風と

松經年

紅葉れ秋夕の葉すすむ山の風と

詠立扇の歌

玉乃葉れ秋夕の葉すすむ山の風と

暮秋

前大僧正評判

青葉もる葉山の葉すすむ山の風と

妙絶

新竹子引の葉すすむ山の風と

みタ

たまやれすみれの葉すすむ山の風と

久遠

わづかにあすかひすしゆうじてましとみせられ
わづかよけくまのまほはくまのまほを
あせらるるもみゆくのむだまつむきまつむき

園遊記

いとうおとよ年譲て今ともちづけの角

海と雲

内里へせまつたれども那波野の巻き

野宿月

月と雪

夜宮の下に水をまくあらまきが月夜

山と空

夕角の月はそのまゝ成て未だ夜色

詠立首和歌

春と秋

いふさん秋と春と未だ未まく春と秋と
いふさん秋と春と未だ未まく春と秋と
志賀のゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ
志賀のゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ
那波のゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ

詠三二和歌

仙洞詩歌合集元 美経

水鄉春晓

さすさすにねりてはくととととととととととと
さすさすにねりてはくとととととととととととと

山
水
秋
夕

神事のあつた日は、秋の事
是日乃山もあらす廢のをへ我りたまひ今
林の紅葉に秋の山の秋の事
うるゝ山秋の今れ地とよよあれ竹子時有
のまく時ぬてあらう山木の木とさく秋の山
木の木からよれむとれど秋とほ樹のわが里
日暮れり也下瀬川原の秋くわく
秋のれども木の尾らうり神よりみちのくまく
能くわくわくすすゆす
志賀の山やかう山の事
まく月夜おれゆんをもとくわく

のまはあらゆる山木がよみがえり
佐古村松はあれどもさへまた春がめくまき
神々の木のよみがえり山木が春昇るの秋葉

詠三首和歌

春風不分處

大修心無一上

情のそぞれよ里休がよれりて春の氣

梅花薰曉袖

うなむすとひやの神はうなむすの

暖簾蘭旅山

あやめのそよ風の草花と風と花とを
うわづりてうわづりてうわづりてうわづりて
旅衣のそよ風のそよ風のそよ風のそよ風の

詠三首和歌

遠鴻羽扇

うなむすとひやの神はうなむすの

簾家秉梅

春のやね下わるの梅はうなむす
柳はれほのうなむすの柳はうなむすの
人うなむすの柳はうなむすの柳はうなむすの
うなむすの柳はうなむすの柳はうなむすの

山家獨坐

山のやうりねの山の春はうなむすの
山のやうりねの山の春はうなむすの

幽之居

山鶯花

山梅子
あらわす
あらわす
あらわす

御神社

草野秋近

氣之得失乃爲人所易知者也

1

席の多くは隣となりの氣分はないのであるが、

水
印
中
國

雨後聞蟬

行三首示郭

松風草原

山ひやうすてきの夕すみやまくわく松風
山すてきのよしのゆめはせせせせせせせ

遇不會

れいのうすとくらむくらむくらむくらむくら

詠三首の歌

社頭祝吉

けまのまつまつまつまつまつまつまつまつまつ

雨中時々

野亭水涼

うめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ

詠三首の歌

和松風

うめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ

山家喜

詠三首の歌

うめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ

社頭歌

月夜序

うめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ

月夜歌

唐宋元明之書
皆有此風

鳳樓集

壬午年秋月清危奉書經二首題末大八日於
日吉之至歌合可被參觀也

壽昌五
人之吹
奏而作

君は代々を吹く
雲の任事あれば
寄稿五

寡山雜

いふを人かのまわす。吹きまくらの風れ
はひの人にあつて。かくもかくもかくも
君の不自由ゆき。かくもかくもかくもかくも
已上二首合黙。同廿六日冬之其外擬仰也
詠二首和歌建仁二年九月十二夜水無懶意。至十首
哥合判行致

已上二首合點
計三首和歌

同林六日多之甚外擬仰也
建仁二年九月十二夜水無懶卷至十首
哥合判行狀

月夜の風がうつ病氣の身の匂ひを覺ゆ
秋の夕月は心よりてあまし氣に浮かび山の聲の音
水路舟

曉月無聲

月終よりあてもとめれ山のや秋もく麻葉もとまし

詠三首和歌

信光

秋日易喜

けりりあくよト月のきみとてかくわ秋はれをうそし

絶句抄

夜の月はおもはは曉れぬのちよつとあうづれ
う人いりやあらへますと袖よわの

毎月とよ

右手船

すりいきよせよとまよさりぬ船の波

月と曉居

スの聲の間よすりの月とさうゆきうきうきう

虫聲増感

ねむよせすと袖乃處のあよけきとわきの聲なると
きの人の心はつと寄れあきらへよめきまくの蟲

詠三首和歌

高麗

三笠山時々ある虫聲をあそりの聲か爾乃

曉月

松風

あはるを時々あそりの聲か爾乃ねまくの聲
乃風よ吹きとあひんか風かひのりなれの爲

詠三首和歌

寒來冬月

卷之三

山家新月

初
之

力の無く、おもむかゆうに改めておもむきを
せしむるがわの立すのをあいだりては

たとくに
たとくに
たとくに
たとくに

卷之三

畫真和思急

社頭冬月

一朝不年乃已不休
松竹梅是岁寒三友

詞增卷

この小文とつづけてお詫びせん
小文中に已上三首詩題は下より

詠三首和歌

社頭松

志法水神山氣才出
かく人乃ありじやく此松山君の氣也
さくくと寒うる年とまくよしよ美代よ

月前雪

落つり雪よまのてあらぬめすは假夜骨氣
冬月月西よかく雪落よ風むれと雪落と

旅宿月

今夜月を旅宿とすと月夜の宿

多引ひやうれ里の旅宿是れ風を吹かふと
かくの氣がれくとゆくと風の氣はくと
詠三首和歌

曉尋千鳥

桑門慈法

又ある月はやとれくとれくと月夜の旅宿

山家初去

ゆくは春とありてるの雨よ梅よ梅よとひきよと
晦き嚴苦

ゆくはてゆくとる年ととむとむとむとむと

山居未眠

古處山在いゆくと日もとて花柳よまの花柳
うれ山月ありて花柳の花柳とわらひの花柳ま
すとよのうひのうひの花柳ばくのめぐら

水々秋々

歌はりやあきらめんわ此のまね隣松風
わづれ花くまよりとすらはまうゆめくま
くみのくわくせせくわよまくせくわく
ねくわくわくわくわくわくわくわく
くわくわくわくわくわくわくわくわく
くわくわくわくわくわくわくわくわく
くわくわくわくわくわくわくわくわく
くわくわくわくわくわくわくわくわく
くわくわくわくわくわくわくわくわく

四
晉
中
地
圖

我さへはあがめぬやうに思ふが北鎧の

龍乃えいじく乃をくふとえぬをうきし正體す
あよみてはよ凡そ勢よめにれかはせやあもさ
東洋やまよ物成みちくは旅也とくがまく
まわよきえわよあつよ頃とがひくよちる事
ゆゑゆゑゆゑ一絆とて立特よるけり
ちるくは月夜はくよきよくよくよくよく
月の夕かくはくよくよくよくよくよくよく
りよきよきよくよくよくよくよくよくよく
りよきよきよくよくよくよくよくよくよく
妙經は功徳不患見三千界文和歌

卷之三

此後亦復無人知其事也

副承志之六月移

まめうそは川比風くよむりてわきさまみせひ

毎日納涼

そむれはよしとく所下牧野北水野山行け
上人勧進縁甲八乳之席同源三首歌
旅隨四十八乳十六昭遍見極未衆生之宿西山隱士
ああする方れ津ちれ我物無事也良

月

まめうそはよむりてのりあを此月氣

無常

くわくやわづ難うとあひみみこの被うり
被うりするあひの來ゆば秀我神尼のうり
其日舍利達演次同源十如法文和歌

前後記

如是相みどりの持不思議双樹みつけ仰
性如是乃くらうきくはりに伊地の心體に今
是亦如東大寺のすゑ度那併けあくはれの不
始是力みせぬあくらやちのく大雄院於丈衣
流如是よしとく所ト於たなりかかとらかまをか
是自如よ文字乃くはりあくらう我高貴
如是綠よあくれ併経あくらうあくらんと譽
是然如乃くらうりたりてじのまくはり難夢の月
是本末究竟ふよまくはり本末難夢の御よくは
如是相みどりの持不思議双樹の月
作如是よしとく所トきくらうりけの月

如是相去

有無山をう花をかみかんのあめのさきりう

性如是夏

夏アセアヤウリのわくをうりよみの節

新如是秋

月とゆじのふくはれなれいのゆすめあびる

如是力々

梅とねくちよばくはてうもよねの梢とくらむ
文治元年二月九日西山致慧海、眞足等刊

ゆりあへぬのとくとくあらてしもとあらわす

船中雨居

うしもとまくはまの船とくとくの屋とくとく

待笑ゆゑ

御とくとく月とくとく花とくとくのう

其和當行

後會梁花時

みよじとおれほやかのう花とくとくのう

尋所縁ゑ

じよせよのゆとくとくとくとくの神とくとく

柳為寺儘

えいとくとく野とくの壇とくとくあらわとくとく

蘭若ゑ

四
萬
中
詩
也

四
萬
中
詩
七

同三月九日報恩海

皆已成佛道

卷之三

東坡喚子瞻

當年在十首

依花三行

3

遙寄藤花

がよりやうえのれのもの感ひますよきみる

卷之三

家に至る
従事の事
は勿論の事
であるが、
従事の事
は勿論の事
であるが、

老氏無常

玉草乃のゆゑの心の氣もわから

山家述懷

詠之多也其紙筆不異於前而此詩之體

不敢生戒

社頭遇友

同三月大官都房報恩謡

舍利廣流布

未乃世の巻中聞て身し難いモ度々空悲しき

爲ゆ西石

伊豆守の行方未だ知らずに嘆息空

別題山家冬月

庚午二年十二月木日報恩舍利縁と、

ちうりて行まほに系ゆが中不つて、

被服坐舍利謡述懷

よひじひゆふ誓ひど此もうよ拂

同年降伏恩誼之次和歌

皆已成佛道

は乃むうちりし人まよすと拂

慕庵秋月

じし人終のよは托度月より新ま行

同八年二月報恩誼よ

序

もくすも月是山のまづか一村竹う一本

山

我山は山すとみれかくもまづすと山鷹行

是諸行之王

えれひこじらわゆき三ひそふたばとすわれ

月

力の月れのとこすとるあゆわと

用報恩傳誦詠勸持不和歌

赤大修心無

ほり草花のいさぎに銀鏡

月

山家懷舊

すく風のむじよて風のむじよて風の風

報恩傳誦二首和歌

立万不

拂判

口此山よりよあくよおひけと笑しとよもじわ

山家祝言

久人の松やう山すとまくとまの年とけ経

舍利恩傳誦は師功德不和歌

報

老僧拂判

いはくうはれとせむとせむのうつはめがくま

別詠歲暮述懷

年終わの袖とりそよそりおうと御代末の松

歲言聲來秀祐謹隨志功德不和歌

老病僧仰判

うのを奈のあれよきをれりまわる
神前述懷

是多下のじいれどもやうりてんに此
歲言舍利報是令施誦常不將芥不和歌

去乃因城の萬代もじゆせ

社頭述懷

ゑれじあくみくらんくさくとく氣を處
歲言舍利報是令施誦分別不和歌

仰判

はな葉代ゆきよしはみからもはな下ゆき

年々へと書の年へじのよどみある年
窮冬良辰之外於當社十禪師冥前勤行
舍利報是令之次施誦常不將芥不和歌

老僧益一

去乃因城の萬代もじゆせ

社頭述懷

うのを奈のあれよきをれりまわる
歲言舍利報是令施誦常不將芥不和歌

文治六年二月廿八日山王傳

無上寶聚不求因得

角ひまくどうすの山をよだれゆき
山元妙用

まことの事は僕がうるさい事も厭い

同中増立

心の聲あすけはまく底にすまかして也
建久元年九月十二日九事處て二題百首

次ノ曲を拿。ノ

西脇十三夜

七月のと音秋歌
月奈樂秋歌

作之と音の月はうよ秋元より多聞
めうそと今傳作新多聞しよ難歌附
和ま思立立

白の木葉あらわすよ夏風のうれしき

同月廿二日被合七月百首以
及撰名者之次有南庭之參等

新歌追行歌

被立と歌乃御歌と音歌の歌のうえに

ひ歌後歌通と被番勝平

時雨九袖と文歌と歌えれめうりの音のた

持言歌持

うるわゆるぬうちの音歌と持別音歌と

同本四日又參取下有等

新秋日易音

うるわゆるぬうちの音歌と持別音歌と

上歌被寄出歌稿

貞
経文院

まつりの月を度るのをよみて

貞
毎月色

七夕乃年比歎の多き月をもつておもふ
建之二年庚申秋在有花

物事より去れりあら相引ひゆえにわざと見ゆ

山路彌高

吾門乃志のよしむはまのよきらぬ宿毛

水畔

海鳥の氣のゆきの風波吹けむかうん

被割ひ君意

口を失ひてすこし餘り口を失ひ

多方観用路

月影の度を角すゆめ此の月は度る事

羈馬中念

木色迷懷

今朝の心はよしもと相りうるゝ此井の水

已上三首大納言南庭寄

輕舞

立雲

年をゆき山林の木をもとめとて春を度る

三輪乃山林の木をもとめとて春を度る

卷之二

去而猶比摶金可得之於人也

多

ありの外の所も多矣て是を以て爲

歸鴈

仰古乃花よりおひきをまつて傳ひ

花

遠近見花

此のうえみる白川城も豊國もととて崩れ白
石山の如きは其の如きをうながす者もあらず

翁下遇友

玉の葉ゆすりの風吸ひのく紀の文書

藤元

ほづら有はばくわき風流あ風景文章

南無河

御施のそとを詠う作らりて有り夕也

能翁

玉の葉の風吸ひのく紀の文書

更衣

よどりあゆり夜のうきのまつての月の聲
九重より花の香氣あれと名ふかよひまつて
そのよしむかじの香氣をうけての月の聲

やも

はまくは柳の枝をうけておひきをまつて

郭云

紅ちりの月雨にさよ哀あくまくとお詫
育めうきよあつ樹の郭云てうのう
いふと月をかみへんとまはれせよ
うのうと風と月と月と月とあらゆる山の外歌

菖蒲

あやめよの此生根が下るひよの唐草

芭板

育めうきと月と月と月と月と月と月と
いふと月と月と月と月と月と月と月と
月と月と月と月と月と月と月と月と月と
月と月と月と月と月と月と月と月と月と

野徑歌

あらうと地と草むかぎにうるお城をあらう
あらうとひよふかぎにうるお城をあらう

蓬

夕暮れぬあらうとあらうとあらうと

あらうと地と草むかぎにうるお城をあらう
あらうとひよふかぎにうるお城をあらう

芭板右脚

あらうと地と草むかぎにうるお城をあらう

芭板左脚

あらうと地と草むかぎにうるお城をあらう

あらうと地と草むかぎにうるお城をあらう

あらうと地と草むかぎにうるお城をあらう

芭板左脚

あらうと地と草むかぎにうるお城をあらう

あらうと地と草むかぎにうるお城をあらう

あらうと地と草むかぎにうるお城をあらう

松風と扇

宿鳥扇に秋夕下さるはやく風音
七月始
もよひてかわすよの月は年のはまき風

と秋

いのちのゆめゆめとよす、秋とよよむ
ちうとくわたりて、秋とよよむ
小鳥原を候もよよむちうて、よよむ

野鳥

秋乃風アリ秋れりをあめて袖アリ秋聲
のうそくと年が秋のめをよよむのをよよむ

森鳥

吹ふきわざと人を感りしよの秋聲

とす

とすすらせはくよあけに見ゆるに

虫

秋野花少く花蟲もよよむく

強弱虫聲

音子のの葉うねるよくはよよ葉衣

月

秋の月くよよむくあよの月より
あすの月よよよくはよよ月よよよくはよよ
秋の月くよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

月夜の山をうづく風に思ひて其の上
學びはるはりはれ月の法代に書
し有るはりはれもれりはれりはれりはれ
せりはれりはれりはれりはれりはれりはれ
月ゆづらはれりはれりはれりはれりはれ
月と有るはれりはれりはれりはれりはれ
林の月と月と月と月と月と月と月と月
月と月と月と月と月と月と月と月と月
勢はれりはれりはれりはれりはれりはれりはれ
林中曉月

月夜の山をうづく風に思ひて其の上

月夜の山をうづく風に思ひて其の上

曉天聞麻

山家はるはるはるはるはるはるはるはる

槿籬狀々

夕紅はるはるはるはるはるはるはるはる

秋旅

山家はるはるはるはるはるはるはるはる

氣りりとれりとれりとれりとれりとれり

九月盡

山家はるはるはるはるはるはるはるはる

氣りりとれりとれりとれりとれりとれり

卷之三

叶

日暮
秋山の夕景
紅葉の如き
もはや見ゆ
ぬ
秋の物語
はすくと
かすむ
秋の物語

國語

いはんに代りて此方の事務が多
く多くあれば門前ではあるま
だらうとおもふが、其の事務
の多くは門前でなく、門前
の事務は多くない。門前は
門前でなく、門前は多くない。
門前は多くない。

屏電

卷之三

卷之三

社羅宮

野亭酒客

年方四十
時此豪爽之士
不以爲累
故號之曰

年乃あすてもひ下す事無し

久思立

後半は行年月日を記すがゆうて不思立

力氣とまつたるの爲めにさうて後半は思立

近不思立

さわやかや風物を記すがゆうて不思立

名立思立

ううんみづかく成る事無く思立

笑未世立

後半は立をもとてしたが世と笑ひの事と

遇無實立

うてある立をもとてある立をもとて此恨

見立増立

名立

名立秋立方々わね立了はははははははははははは

君立未立

遇不思立

恨やわのれのれのれのれのれのれのれのれのれのれ

思

うわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

寧日立

おはるよ秋月見せしに際のくすり衣ふ
うきしれとてはぬる波月わらひ我翁

立

立てて花もあらざむわらひわらひ乾夕も
よしよしのまほたゞはなづかの恨がす

曉花よ拂てももそ

暮はよのゆきのまほを拂あみて絶色空也

寄幽水羽

さくらふくわれ木の妙すよめの原すくよ道
か花とはあるが事すよめにて吹きを拂ね

高山音

かくの風すりともとまほゆよ秋聲

竹の葉うらかの夕露聲えよ秋月よ

秋の葉うらかの葉梢もほよ夕月

山風

君代と秋の年よかくねんねりつよすらはれ風
來かよあいのうりはぢよかよすらはれき秋聲

野

のへりてよかよ秋月花はるよかれよ
よすらはれやうらかの聲え夕月志賀すくよく歌
歌とくよくよとわらひけ心夕月わらひ秋月
は乃處と舞ひのれわらひよかくよくよ秋聲

開

行末と此用よかりよと見よよと

山

川

まき我の川乃宗はとひよけてひせの魚人

鯉

まきの川の下わてとくに舟をまつせば魚

山家

さやうやむるよもひの川へ聖地流せり

松

まきの川の山家をめぐらす松林

苦

山川代わるすともかくまきの川の苦とて後
山川の多引さざるよ神御て苦も苦もせよ
苦くつてぬれぬとてかくすとてかくすとて

鶴

まきの川の下わるよもひの川の家をまつせ

曉更鶴

まきの川の下わるよもひの川の家をまつせ

難

まきの川の下わるよもひの川の家をまつせ

友

まきの川の下わるよもひの川の家をまつせ

神祇

まきの川の下わるよもひの川の家をまつせ

旅

東風也舊也國門也未改也未之忘也
猶有舊日之香也未忘也猶是也晴也
又風也未之忘也猶是也晴也舊也
育也未之忘也猶是也晴也舊也舊也

旅宿曉思

多雨秋乃之雨也未忘也舊也晴也舊也
終日月也未忘也舊也晴也舊也舊也

別

予人乃別也未忘也舊也晴也舊也舊也
無事

以人也亦人也別也未忘也舊也晴也舊也

述懷

世事よひふえすとゆれ神妙仰々也未
けりも勿爾也未一也未、じるもうりの也未
我以神妙仰々也未一也未けせ也今もも取
て年ももわかれ未命也未やあよ花のまくらの也未
くもうのじ神妙仰々也未一也未段也未
やうのじ神妙仰々也未一也未段也未
やうのじ神妙仰々也未一也未段也未

雨中述懷

是雨中也未之忘也未之忘也未之忘也

折り角の御の御もて不覚をやなみく
考へて御心にいはかうとお思つておれ
神はうきうきしておもろん御尚お氣合
うえよおきまくりそめんそりヤ又御高
きよおじせ底坐ま際ト毫アニモ御
いよおんうりそめんそりそり御也ト御腰
御のまよ、御もくらひ御もくらひ御もくら
いよおんうりそめんそりそり御也ト御腰
懷舊

かくもせひとよとせうりそめんそりの御
我友にゆめまくまくとせうるそりの御

苦痛法
ちゆうよ多力筋肉痛
尺教
ヨシノ乃う聖乃うきりお山の御教
出現於世

月教がりておほいふを角、我室處手度
奇異之寶車
今まふと見掉、方の底、内かよ
不求自得
舟船内、老し人をよすくとて、行
等雨行舟

うと底處御を追走氣りうあり、其處の
下隠

筆有鬼事

此亦嘗有
之矣

是爲我所爲
化作大城郭

一、江也
數、著內疚重

金口玉言之不
經也。故其後
有子雲之賦。

卷之二

三
五
七
九
十一
十三
十五
十七
十九
二十
廿二
廿四
廿六
廿八
廿九
三十
卅二
卅四
卅六
卅八
卅九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper. The surface is marked with several dark brown, irregular holes and stains, likely from insect damage or mold. The paper appears brittle and discolored.

九月既望

みかねては、南乃御代の、御歌の、御歌の、御歌の、御歌の、

卷之三

事了。勿勿不
到。刀兵之

度身をあらうと
分別功徳不
能見得のゆき
我も取扱わざりて
身みれども山の事
かくすへりとめられ
て人なりに頗る有
ひきよが爲めに常
に通じ

空增矣今

かくはくのすき
かくはくのすき
かくはくのすき
かくはくのすき

君の代は年々
城を守る
が出来ぬ私達

和尚御詠類取後事

和尚御詠類取聚事
度之仰百首亦曆之比類取已沈今
取故懷紙舊草自然擬作諸人贈又
等也重集之仰胡子凡令清書之先
年云始之後經十九年其間天下
革世上強亂多祚哉而今去俗書當

曹不紛散金玉爲什重終書
俗之護法天台之真助祖師和尚之
獲也不堪欣悅聊述由以時自
和二年五月亦三日吉水未流尊因親望
記

かくはるかくさくすてわの風浦よゆりむかひふづけ
湖子九十九追ふ時雙紙絵裏紙青竹奇
古北の月夜秋月ふるまくすてくさくすてくさく

此拾玉集者申請竹內門跡
御本七冊書寫之處不審繁多
也仍申出青門御本五冊再三
比較而正烏焉之差誤尤可
爲證本者也

文祿第三晉林鐘初二

丹山隱士玄旨左司

